死亡フラグの回避方法を教えてくれ

深尾マサキＪ(フ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死亡フラグの回避方法を教えてくれ

【Ｎコード】
Ｎ７４７９Ｘ

【作者名】
深尾マサキＪ（フ）

【あらすじ】
どこにでもいると思われるハーフに見えないハーフ主人公・中崎勝。
とある理由でオオカミ系美少女に襲われたり、イノシシ系美少女に天井から吊られたり、ドラゴン系美少女に殺されかけたりと、ハーレム（？）という名の死亡フラグスパイラルに巻き込まれていく。
中崎勝は最終的に死亡フラグを完済する事が出来るのか！？
死亡フラグ回避コメディ、ここに誕生です！！

ＭＦ文庫Ｊを意識して書いています。

※エブリスタに同時投稿するかもしれません。

プロローグ

世の中には死亡フラグというものがある。

それは「俺、この戦いが終わったら結婚するんだ」とか「俺に任せて、お前らは先に行け」とかのセリフを言ったりすると立つというのは一般的に知られているが……

……知られているのか？とりあえず知られているという事にするぞ？

他にも死亡フラグが立つ理由はあるが……

死亡フラグが立った場合、回避する方法はまず無い。

せいぜい苦しんで死ぬのが関の山だろう。

だが、回避できる方法があったとすれば？

あれば俺に教えてくれ。

何故なら俺、中崎勝は今死亡フラグ立ちまくっているからさ。

1．学校で会ったのはオオカミ系美少女！？

死亡フラグが立ったのは2日前――春も深まりだした時の事だ。

俺は純然たる１６歳の高校2年生で、真面目というわけではないが、不良だったりひきこもりだったりという特殊なキャラではないので、普段同様学校に向かった。

そう、普段同様学校に向かったのだ。

しかし、いつもと違う事が1つあった。

いつも一緒に登校している、幼なじみというより腐れ縁と言った方が良いだろう関係である長宗我部晴美の姿が見えないのだ。

いつもなら食パンを口に加えながら、後ろからイノシシばりの勢いで突っ込んできて、躊躇なく俺の背中に飛び蹴りをいれてくるので、身構えていたのだが……

待っていても全く来る気配がないので先に行くことにしよう。どうせ遅刻だろうと思い、大して気にしなかった。

この時は、このミスであんな事になるとは思いもよらなかった。

所変わって学校。

「ガルルルルウゥゥ」
「なんでこうなるんだー―っ！！」

いきなりオオカミに追いかけられてます。

（死亡フラグ　０＋１＝１）

そのオオカミはまるで縄張りに入ってくるなといわんばかりの勢いで吠えながら俺に向かって突っ込んできた。

その攻撃を直前で走る向きを９０度変えてひらりとかわす俺。

毎日晴美で鍛えていた反射神経がまさかこんなところで役に立つとは……

と今ここにいない晴美に感謝しつつ、目の前のオオカミに目を向ける。

「あおぉー――――――――――――ん」

するとオオカミが地面をも唸らすような大きく透き通った声で遠吠えを始めた。

「これぞまさしく負け犬の遠吠えかな」

まだ1回攻撃を避けただけだけど。

と、感心していると、ふと周りから俺を凍らせるような、かつ俺をロックオンしている視線を感じた。

それも1個ではない。

もしかしたら10匹以上いるかもしれないオオカミの群れ。

その大群が俺を取り囲んでいるのだった。

「「「「「「「「「ガルルルルウゥ！！」」」」」」」」」

「スラ○ムじゃないんだから仲間増やすのは反則だろーーーっ！！」

あれか？

８匹揃ってキングオオカミになるのか！？

何だその生き物！？

…乗り突っ込みしてる場合じゃねえぞ俺！！

ともかく今は！！

「逃げろーーーーーーーーーっ！！」

しかし回り込まれた！！

「うがーーーーーーーーーーっ！！」

この状況で俺はどうすれば良いんだ！？

選択肢はだな…

1．勇敢に立ち向かう。
2．土下座する。
3．近くの木に登る。

まともな選択肢が3しかねぇー――っ！！

いや待て俺、3を選んだ場合どうなるか考えてからにしよう。

（ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ〇エ風になっているのは中崎勝の趣味です。）

if・3を選んだら

中崎勝は木に登ろうとした！！

しかしMPが足りなかった！！

中崎勝はもう一度木に登ろうとした！！

しかし中崎勝はそもそも特技『木に登る』を覚えていなかった！！

オオカミ達の攻撃！！

１２０８のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

（以上、中崎勝の脳内妄想でした。）

おぅ…危ねぇ、死ぬところだった。

なら1か2のどちらを選べばいいんだろうか？

……そういやオオカミって頭良かったよな……、誠意を持って謝れ

ばなんとかなるんじゃないか？

（ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ〇エ風になっているのはやっぱり中崎勝の趣味です。）

中崎勝はナチュラル土下座を繰り出した！！

しかしオオカミ達は見向きもしなかった！！

中崎勝はスライディング土下座を繰り出した！！

オオカミ達は怒りだした！！

オオカミ達のテンションが２００上がった！！

オオカミ達はスーパーハイテンションになった！！

オオカミ達の攻撃！！

１２０８０のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

（以上、中崎勝の脳内妄想でした。）

ですよねー。

オオカミに土下座の意味なんて分かるはずないな。

よっしゃ、なら1を選んだら…

（シツコいようですが、ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ〇エ風になっているのは中崎勝の趣味なんでどうしようもないです。）

中崎勝の攻撃！！

オオカミ達はひらりと身をかわした！！

オオカミ達の反撃！！

１２０８のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

（以上、中崎勝の脳内妄想でした。）

全部ＤＥＡＤ　ＥＮＤじゃねぇか！！

なんのための選択肢だよ！！

ああ、もうどうしようもない！！

「俺…、この戦いが終わったら結婚するんだ…」

（死亡フラグ　１＋１＝２）

自ら死亡フラグ立てちまったーっ！！

「メディーック！！（メディーックとはもうどうしようもないに使います。）」

（死亡フラグ　２＋１＝３）

あぁあああああ！！

「終わった…、俺の人生…。そんなに、悪くなかったぜ…」

「……どういう事？」

「どういう事ってそりゃあ、なんだかんだいって晴美っていう幼なじみにも恵まれて、楽しい生活を過ごせた……って」

誰だ独り言に乱入してきた新手のジンオ〇ガは！！

声の主の方を見るとオオカミ達の中に１匹だけ、いや１人だけ、四つん這いの女子高生がいた。

騎士のように凛々しい目を持ち、スラッとしたモデル体型で我が校の可愛いと評判の制服をより一層際立たせているが、腰まで伸びているであろう銀髪がボサボサとなっていて、体にも所々に傷があるので、オオカミ系野生児という言い表し方が一番しっくりくる。

というか耳が生えていた。

そんな美少女がオオカミの群れに紛れ込んでいたのだ。

しかもこの美少女がボスであるらしく、彼女が1吠えするとオオカミ達はどこかに行ってしまった。

その後、彼女は四つん這いのままで勝を警戒しながら、襲った経緯について説明してきた。

最初に発せられた言葉は俺には全く意味が理解できないものであった。

「……縄張り」

「……侵入者」

「いや、侵入者はむしろ君達だけれども」

「……私はこの高校の生徒」

「いや何の事かさっぱり分からないんだけど」

オオカミ系野生児（美少女）は自らの制服を俺に見せつけながら、

コイツ馬鹿なんじゃないだろうかという目で睨んできた。

「だ、だろうね。でで、でもね、俺もなんだよ」

勝はその迫力に負けそうになったが、なんとか言い返した。

「……侵略者」

「何故そうなる！！ただ俺は1生徒として授業を受けに学校に来ただけだ！！」

「……今日は学校ない」

はい？

「な、何を言ってるんだ？が、学校ならここにあるじゃないか」

「……授業ない」

え～～～っと？

「もも、もしかして今日はずっと自習なのかな？」

「……建立記念日」

待て待て、もしかして晴美が来てなかった理由って…

やっと言葉の意味を理解した勝は

「メ、メディーック！！」

と叫ぶしかなかった。

（死亡フラグ　３＋１＝４）

いつの間にか死亡フラグが増えてるぅうううう！！

「……覚悟は出来たか」

「いやいやいや！！今日間違って来ちゃったのは認めるけど、なんで襲われなければいけないんだ！！」

「……縄張り」

1周した。

「だからそれがどういう事か分からないんだよ」

「……侵入者」

「ループする気がするからここらで止めようか」

「……私はここの守護者」

ええと？また変な方向に話が傾いたぞ？

「守護者って警備員ってこと？」

「……それでいい」

生徒兼警備員ってどういう事なんだ…？

「んで、生徒兼警備員さんはなんでまたこんなところにいるの？」

「……山主＝ウルフ＝凛世」

「え？」

「……私の名前」

なるほど、山主はクォーターであるらしい。

どおりで日本人離れしたモデル体型であるわけだ。

「ええと、じゃあ山主」

「……凛世でいい」

凛世はムッとした表情で犬歯を出しながら主張した。

「あぁ…うん、分かった、凛世。なんでここにいるの？」

「……ここは私の家」

……は？

「……ディスイズマイホーム」

「いや、英語にしなくても分かるから。ええと、つまり凛世は学校に住んでいるって事？」

「……イェス、マム」

「なんか違う気がするけど……、えっとつまり凛世は家出少女って事かな」

そう問うと、凛世は首を大きく横に振った。

「じゃあ学校に住んでるってどういう事だよ」

「……」

「おいおい、俺は殺されかけたんだぞ、それぐらい教えてもらっても別に罰は当たらないはすだ」

「……」

しばらくの沈黙の後、ようやく凛世は重たい口を開いた。

「……家、ない」

あれ、コレ聴いたら駄目なヤツ？

「あぁ…、あの、その、なんだ。スマン」

「……」

「……」

また沈黙が俺達を包む。

（ぐぅ～～～～～～～っ）

その沈黙を破ったのは凛世のお腹の音であった。

「えっと、お腹減ってるの？」

「……減ってない」

「いや確実に減ってるよね、お腹鳴ったよ」

「……鳴ってない」

「いや大きな音が鳴ってたよね」

「……オナラ」

「自分を汚してまで嘘をつく必要性はないと思うんだが」

「……嘘ではない」

「あーっ！！分かったよ、俺はウッカリここに今日の昼ご飯になるはずの弁当を落とした。凛世はそれを拾った。ＯＫ？」

「……占有離脱物横領罪」

説明しよう！

占有離脱物横領罪とは横領罪の一種で、遺失物、漂流物その他占有を離れた他人の物を横領する罪である！

法定刑は、１年以下の懲役または１０万円以下の罰金もしくは科料である！

（ウィキ○ディア調べ）

「あぁ、もうどうしたらいいんだ！！」

「……、（バタッ）」

「え！！ち、ちょっと大丈夫！？凛世！！」

返事がない、ただの屍のようだ。

なんだ、ただの屍か……。

「って駄目だろ!!今すぐ保健室に運ばないと!!」

と思って、凛世を持ち上げようとしたが、そこで問題が発生した。

どこ持てばいいの？

お察しの通り、凛世は四つん這いだったので、当然前のめりになっている。

そのため、持ち上げようとすると、あの、いろいろ必然的に触ってしまうのだ。

（落ち着け中崎勝!!相手は気絶している!!触ってしまうのは不可抗力だ!!）

こうして、中崎勝は理性をギリギリ保ちつつ、凛世を保健室に運ぶのだった。

さてさて、日も次第に落ちてきた頃…

「……んっ」

「あぁ、目が覚めた？」

「……ここは？」

「保健室。幸い、鍵は開いていたからね」

開いているのはむしろ問題があるが。

「……何故？」

「何故って？」

「……助けた理由」

「あぁ…、そりゃあ目の前で人が倒れたら、介抱ぐらいするでしょ」

「……襲ったのに？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして俺を覗き込む凛世。

「そんなの関係ないって。まぁ、襲われるとは思ってなかったけど……」

「……ゴメン」

「いや、ケガ一つ無いからいいんだけどね」

精神的ダメージと死亡フラグ４つ食らったがな。

「……責任、とる」

何この展開！？

もしかして命令したらあんなコトやこんなコト、更にはそんなコトまでしてくれるのか！？

これなんてエロゲ!?

「……群れに入れ」

ん?何か不穏な空気が流れてるような…

「えっと、それはどういう意味でしょうか?」

「……一緒に暮らせ」

えっと、これはもしや噂のプロポーズというものだろうか!?

えっ!?俺、保健室に運んだだけですよ!?特別なこと全然してないですよ!?

こんな美味しい話があるだろうか!?いやない!!(反語)

よし、ここはやんわり断ろう。

「でも、俺にも家があって、家族とかが心配するだろうし」

あ、因みに俺は2才下の妹と2人で暮らしている。

両親については伏せておこう、つーか喋りたくない。

「……なら夜だけ」

状況が更に悪くなったよ！？

「えーっと、つまり夜のお供をしろと、そう言いたいわけですね？」

「……そう」

超絶展開キターーー！！

「宜しくお願いします！！！！」

こ、これは罠であろうと、はまらざるを得ないっ！！

コンピューターウイルスに感染するかもしれないのにエロサイトを巡回するみたいなものだ。

「……なら」

すると、凛世は俺の胸ぐらを両手でぐっと掴んで、そのまま俺の顔を凄まじい膂力で引き寄せたかと思うと、

「……狩りに行くぞ」

と言って俺を引きずり出した。

――俺の唇に凛世のソレを――って展開じゃねぇのかよ!!

とちょっとキレつつ、いきなりキスされなかったことに少し安堵していた。

って、狩り？

てことは…

「やっぱりこうなるのかぁあああああああああああ！！」

熊に追われている自分がいました。

自分でも馬鹿だったと思います。

狩りは朝まで続いた。

死ぬかと思った。

熊に襲われたかと思ったら、蛇に絡みつかれるわ、コウモリに噛みつかれるわで大変だった。

凛世はというと……

「……♪」

その熊と蛇とコウモリを丸焼きにしていた。

化け物かよ…。

明日からもこんな心臓に悪いことが続くのか？

「……明日来なかったら」

「来なかったら？」

「……この熊のようになる」

と言って、木の棒に刺した熊の丸焼きを俺に向かって突き出す。

こうして俺に死亡フラグが立ったのだった……トホホ…。

2．朝襲ってきたのはイノシシ系幼なじみ！？

オオカミみたいな美少女に襲われたあげく、その美少女に日が昇るまで狩りに駆り出された後。

俺は帰ってる暇がなかったので、そのまま校舎の４階にある自分の教室に行き、１番乗りだったらしく、窓側の１番後ろという、絵に描いたような特等席である自分の机で突っ伏した。

にしても…

眠い。
眠い眠い。
眠い眠い眠い。
眠い眠い眠い眠い。
眠い眠い眠い。
眠い眠い。
眠い。

なんだかんだで徹夜した挙げ句、家にすら帰っていないため、心身共に疲れ切っていた。

ここで寝てしまっても、罰は当たらないだろう。

というわけで、目を閉じて授業が始まるまで睡眠を取ることにした。

さて、ここで過去の話でもしようか。

これは俺が9歳の頃だった。

今でこそ乱暴でイノシシでついでに巨乳となった俺の幼なじみ、晴美だが、9歳の頃は正義感の強く、元気な女の子だった。

俺はというと…

イジメにあっていた。

それは強者が弱者を痛めつけてからかうという、至ってノーマルかつシンプルなイジメだった。

そんなイジメからいつも晴美が助けてくれたっけ。

それで助けた後、決まって俺に言うんだ。

「そんなコトだとアンタ死ぬわよ」

俺はこの言葉を最初はあまり気にしていなかったが、何度も言われていたせいか、その気になっていた。

それからというもの、俺は毎日晴美とトレーニングに育んでいる。

それは今であっても変わらない。

1日でもサボれば、死ぬより怖い拷問が待っているっていうから尚更だ。

……ってあれ？

昨日トレーニングしたっけ？

……嫌な予感がする。

何か、北北西の方あたりから殺気を感じるのだが……。

「まぁあさぁあああるぅうううううう！！」

（死亡フラグ　４＋１＝５）

ガバッと起きて直ぐに臨戦態勢に入る俺。

俺の選択肢は……？

そこに天から３つの選択肢がぁ！！

1．窓から飛び降りる
2．バリケードを造る
3．自尽する

あれ？

直接闘うという選択肢はないの？

もしかしてマトモに立ち向かうと死ぬってことだろうか……。

……怖っ……。

…って、んなこと考えるより、今は選択肢のシュミレーションが先だ。

さて、先ず1は…

（毎度毎度スイマセン。ここからは中崎勝の脳内妄想です。ドラ○エ風なのは揺るぎません。）

if・1を選んだら

晴美はまだこちらに気付いていない！！

中崎勝は窓から飛び降りた！！

中崎勝に５３４８のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

（以上、中崎勝の脳内妄想でした）

……うん、分かってたよ、死ぬことは。

飛び降りたら死ぬというのは一般常識であり不変の真理なわけで。

神様はなんでこの選択肢を残したんだ？

俺に死ねと？

……という事は、もしかして既に死亡フラグ確定？

いやいや、まだ諦めないぞ、２を選んだらどうなるかまだ分かっていないんだから。

（これからは中崎勝の脳内妄想です。この説明が面倒くさくなってきました）

ｉｆ・２を選んだら

晴美はまだ気付いていない！！

中崎勝は机を入り口付近に積み上げた！！

晴美は入り口の机を蹴飛ばした！！

中崎勝は机の下敷きとなった！！

中崎勝に∞ダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

（以上、中崎勝の脳内妄想でした）

……。

やっぱり死ぬじゃん。

3を選べば死ぬのは自明の理っていうか、自尽だから自ら死を選んでしまってるし…。

うん、最後はキメゼリフと共に華々しく散ろう。

せーの。

「メディーーーク！！」

（死亡フラグ　5＋1＝6）

俺が叫び声をあげたのと同時に、晴美が教室に飛び込んできた。

そして俺を見つけるやいなや、イノシシのような茶色い髪をなびかせ、無駄にデカい胸を揺らしつつ、チーターもびっくりの速さで間合いを詰め、喉元に手刀を突き付けながら、

「ね～え？なんでこんな状況になってるか分かってるわよねぇ？」

「もも、もちろん分かってるって！！」

「ぁあ？なんだその態度はぁ！！」

どうやら怒りの琴線に触れたらしい。

「もちろん存じ上げております！！」

「でぇ？誰の責任だって？」

「私めの責任でございます！！」

「そうだよねぇ？バカでアホでマヌケでノロマでクソで……、えっーと、……バカでアホでマヌケでノロマでクソな勝が悪いんだよねぇ？」

語彙力が無くて説得力の無い罵倒をする晴美。

「もうちょっとさ、ビッチとか唐変木とか木偶の坊とかイロイロあるだろ？」

「バカでアホでマヌケでノロマでクソでビッチで唐変木で木偶の坊の勝に情けをかけられる筋合いは無いわ！！」

とか言いつつも、ちゃっかり恩恵をもらっている晴美。

「だいたいね、勝が弱いから私が付きっきりで指導してあげてるっていうのに、生徒からボイコットってどういう事よ！！」

「違うんだ、話を聞いてくれ！！」

「ほぉー、私の納得する解答でなかったらどうなるか分かってるわよね？」

「あ、ああ…。なら言うぜ？昨日建立記念日と知らずに学校に行ったらだな、オオカミみたいな美――」

とまで言ってから気が付いた。

凛世に別れる前にこう釘をさされたのだった。

――他の生徒に言ったら串刺しにして丸焼きにして、『上手に焼けました～♪』と言ってから食べてやる――と

あ、もちろん後半は自分の言葉だ。

というわけで、ここで事実を言うと死亡フラグが確定するのだ。

「早く言いなさいよ」

「び、び、そうだ!!ビーカーが空から降ってきて大変だったんだよ!!」

「んなわけないでしょ!!本当の事を言いなさい!!」

んー、流石に嘘って分かるか…。

じゃあ…。

「ビックリ人間が目の前を通り過ぎたから尾行してたんだよ!!」

「……で?結局はどうなの?」

冷たくアシラわれた。

クソ…、言っても凛世に殺されるし、言わなくても晴美に殺されるし……

つまり本当っぽい嘘をつけば良いんだよな。

ならば！！

喰らえ！！

「ビ、ビ、ビッチだったという事実のあまり気絶していたんだ！！」

どうだ！！自虐ネタだぞ！！

さっき罵倒に使われたを有効に活用し！！

しかも声を震わせて言いたくなかった事を演出！！

見事なまでの本当っぽい嘘だ！！

勝った…、勝ったぞ！！

「あぁ、そう、なるほどね」

「分かってくれたか」

「勝が殺されたがってるって事がねぇ！！」

「良かったってぇえええええええ！？」

その直後振り抜かれる右腕。

警戒態勢を取り払ってしまった俺はなす術もなく、みぞおちにクリーンヒット！！

「ーーーッッッッッッ！！」

声にならない悲鳴が教室にこだまする。

続けざまに左手で首をつかまれたかと思うと、そのまま後ろに回り込まれ、無理やり押し倒された。

そしてマウントポジションを取られた俺は文字通りなす術も無くなった。

「私もね、こういうことしたくないのよ？ただ、勝の将来のために更正させて道から外れたのを元に戻す義務を幼なじみは負っているからよ！！」

「いや、少なくとも権利だろ」

「いいえ義務だわ！！って事で今日から勝を監視するわ！！」

え？

「あのーっ、それはどういう？」

「２４時間私が勝を見続けるって事よ！！」

えぇえええええええええ！！

ストーカーか！！

ストレス溜まって死んでしまうわ！！

というかそんな事されたら…、凛世に殺される！！

どんだけ死亡フラグ立つんだよ…。

と、自分の人生を悔やみつつ、断る方法を考えてみる。

せめて条件がマシになれば良いのだが……。

あぁ、そうだ！！

「せめて放課後だけにしてくれないか？」

「何でよ？」

と疑惑の目を向けてくる晴美。

「そりゃあさぁ？特訓っていつも放課後にやってるじゃん？その延長的な感じでやったら楽なんじゃないか、っと思って」

というか凛世と鉢合わせしたら面倒なので。

「うぅ～ん」

まだ折れてくれない様子。

「人格に関しても特訓するって思えばいいでしょ」

「ん…、そう、そうよね」

やっと納得してもらえたご様子で。

「ていうかなんでここまでしてくれるわけ？たかがただの幼なじみだろ？」

「たかがじゃないわ！！……（それ以外勝との接点がないのよ）……」

「ん？なんか言った？」

「そんな事どうでもいいでしょ！！」

「いや、気になるだろ」

「お互い様でしょ！！」

「まぁそりゃあそうなんだが」

「とりあえず今日から始めるから覚悟しなさい！！」

まじか…。

そして放課後。

縛られて天井に吊られています。

晴美曰わく。

「人格っていうのは人生における経験によって形成されるものなの。つまり、強い人格の人が過去にした経験をさせれば自ずとそうなるのよ」

「何か間違ってないようで間違ってるような…」

「口答えしない！！私の言うとおりにしておけばいいの！！」

「へいへい、分かりましたよ」

「一応言っておくけど、この特訓を次すっぽかしたら――」

「すっぽかしたら？」

「――血を見るわよ」

晴美はそう言って何処に仕込んでいたのか、ナイフの刃をこちらに向ける。

こうして、俺の死亡フラグは日に日に増していくのだった、トホホ…。

3．オオカミ美少女との第2夜。

幼なじみにロープで縛られて吊されるという特殊なプレイが終わった後…

いつの間にか空が赤に染まり、カラスの鳴く声が聞こえだした。

流石に夜まで延長という事はしないらしく、

「扱き疲れたから帰るわ」

と言って帰っていった。

俺はというと凛世と狩りに行かなければならないので、凛世に会わなければならないのだが…

凛世ってどこにいるの？

いや、だってどこで待ち合わせとか詳しく決めてなかったし。

……これって、実はピンチ？

「凛世ぇえええええええええ！！」

駄目で元々、名前を目一杯叫んでみた。

すると、遠くから

（あおぉーーーーーーーーーーーーーーーん）

と透き通った声が聞こえたかと思うと、

「……呼んだ？」

と言ってすぐに窓から顔を出した。

「早っ！！…ってまぁオオカミだし仕方ないか…」

「……？」

「いや、だって耳生えてるし」

「……これ？」

凛世は自らの頭を指差す。

するとおもむろに耳を取り外し…、って

「えぇえええええええええ！！」

ケモノじゃなかったのかよ！！

そりゃあリアルにケモノがいたら怖いけども！！

アニメの男主人公の中の人がオバサンだった時や、ゆるキャラの中からオッサンが出てきた時のような残念感がこみ上げてきた。

「そ、それは？」

「……オオカミ耳」

「ま、まぁそりゃあそうだろうけど。な、なんでそんな物付けてるの？」

「……父親が、」

「どんな趣味！？」

「……群れに馴染むには形からって」

ああ、って父親はオオカミの群れに入る事推進してんだな…、どんな父親だ？

「因みに父親はどういった職業を…？」

「……？昨日いた」

え？

「昨日ってオオカミしか見てないんですが」

「……そう」

父親がオオカミィイイイイイ！？

「あぁ…、一応聞いておくと母親は？」

「……人間」

流石にね！！

オオカミ♂×オオカミ♀≠人間だしね！！

……つーかオオカミ♂×人間♀って何！？

禁断の恋にも程があるでしょ程が！！

っていうか戸籍はどうなってるの！？

確かクォーターじゃなかったっけ!?

もし仮にオオカミ×人間なのだとしたら1／4オオカミ＋3／4人間なのか!?

「えっ…と、その、色々訳が分からないんですが」

「……Ｄｏｎ'ｔ　ｔｈｉｎｋ，ｆｅｅｌ」

「いや、どこぞの映画スターの名言を引用しなくてもいいから」

ブルー○リーね。

「……考えるな、感じろ」

「いや、別に和訳してもらわなくても分かるから」

もう何も考えない事にしよう、最早何も考えたくない。

「……質問終わり?」

「あぁ、もうどうでもいい」

こうなりゃヤケクソだ。

「……なら狩りに行くぞ」

「オォーーーーーッ！！」

結果。

「結局こうなるのかぁあああああああ！！」

やっぱり熊に追われています。

どんだけシツコいんだよこのアオ〇シラ！！

……今度、武器でも持ってこようかな。

いや、防具からの方がいいか。

とりあえずユク○の木でも拾いに行った方がいいかな。

と脳の片隅で割と真剣に考えつつ逃げ回っていた。

「……因みに父親はアレ」

「今言います!?それ!!」

てかアレってどれ!?

「ガルゥウウ」
「ガルゥウウ」
「ガルゥウウ」
「ガルゥウウ」
「ガルゥウウ」

「いや鳴かれても分かんねえよ！！」

鳴き声全部同じじゃんか！！

分かる方がすげーよ！！

といったようなプチハプニングも有りながら、朝まで狩りを続けた。

この狩りで分かったのは、人間死ぬ気になれば何でも出来るものだね、って事だ。

お気付きの方もいるだろうが、俺は2徹したのだ。

なのに走る気力があったのだから、自らアッパレと言わざるを得ない。

それはそうと、凛世っていつ寝てるんだろうか？

これは今後に役立つ情報が得られるかもしれない。

「凛世」

「……？」

さっき狩ってきた熊の肉を持って応対する凛世。

「いつもいつ寝てるの？」

「……授業中」

はい、駄目人間発言頂きましたー。

「えぇと…、勉強とか大丈夫なの？」

「……大丈夫だったら怖い」

お、これは狩りを回避するチャンスかもしれない。

「ならさ、明日の夜から勉強教えてあげるよ、中間考査も近いし」

説明しよう！！

我が校は3学期制であり、5月下旬、7月中旬、１０月中旬、１２月上旬、3月上旬に定期テストがあるのだ！！

今は5月中旬にあたるため、中間考査までもう時間がないのだ！！

ｂｙ・校長

「……いいの？」

「いいのいいの！俺自身復習になるしね」

俺は実はそこまで勤勉じゃないのだが、熊に追いかけられるよりかはマシだ。

「……なら明日から」

（死亡フラグ　６－１＝５）

キタァアアア！！

初めての死亡フラグ回避成功！！

これは大いなる進歩じゃないか？

この調子で行けば死亡フラグ完済出来るかもしれない。

まあ、でも体調が万全でないともしもの時大変だし、明日っていうか今日は休みだから家でゆっくりしよう。

「じゃあ明日の夜、俺の家で……って知らないよな」

「……匂いで分かる」

「マジか！！」

凛世はＦＢＩの特殊部隊かそれに準ずるモノになるべきだと思う、きっとコイツなら最前線で活躍してくれるはずだ。

「じゃ、じゃあとりあえず明日の夜に匂いを頼りに探し出してくれ」

「……イエス、マム」

「だからなんか違うけどね」

とまあ約束をしたところで勝こと俺は、この後起こる大惨事の事も知らずに意気揚々と家に戻ったのである…。

4．家で待ち構えていたのはドラゴン系妹！？

前述したが、さり気なく言ったので忘れている人も多いと思うので重ね重ね述べると、俺には2才下の妹がいる。

俺には似ても似つかぬような金髪でルックスも平均より遙かに上。

なおかつ学校の定期テストでは平均９５点で、所属している空手部を全国大会まで導くという文武両道。

動物で例えるならば、伝説の動物『龍』を彷彿させる。

それが俺の妹、中崎まひるだ。

髪の毛の色が金色なのは義妹だからと言うわけではなく、単にイタリア人の母親からの遺伝だ。

なんで俺達兄弟は一応ハーフって事になる。

妹はその髪の毛のせいかハーフだと気付かれるみたいだが、俺は父親の遺伝で黒髪１００％という、父親から産まれたんじゃないかと思いたくなるぐらい母の遺伝を受けなかった。

そのせいか、ハーフだと気付かれた事は一度も無く、知っているのも身内と晴美ぐらいだ。

とまあ、平凡な俺とはことごとく違うまひるな訳だが…、

こんな妹でも駄目な所はある。

それはこれから起こる事で分かるであろう。

学校から所変わって中崎家玄関。

俺は正直ドアを開けるべきか悩んでいた。

なぜって丸2日も家をあけ、その間連絡すらしなかったからだ。

つまり家に妹を1人置いていったという事になる。

なので妹が怒ってないか不安なのだ。

というか確実に怒っている。

何故なら…

「兄様はまだカァアアアアアアア！！」

（死亡フラグ　5＋1＝6）

叫び声が外まで響いてるからね。

家に入った瞬間跳び蹴りを食らうのが関の山だろう。

せめて気付かれないように自分の部屋にまで辿り着けば休戦協定を結べるだろうから、2階の自分の部屋に妹から気付かれずに入れば、跳び蹴りフラグ、大げさに言えば死亡フラグを回避できるのだ。

そしてここでの選択肢は下の3つだ。

1．木によじ登って飛び移る
2．謝る
3．このまま失踪する

……3はないな。

って事で恒例の脳内シミュレーションタイムだ。

（中崎勝の脳内妄想にしばらくお付き合い下さい）

if・1を選んだら

中崎勝は木に登ろうとした！！

しかしMPが足りなかった！！

中崎勝はもう一度木に登ろうとした！！

しかし中崎勝はそもそも特技『木に登る』を覚えていなかった！！

中崎勝は悪あがきをした！！

中崎まひるに見つかってしまった！！

中崎まひるの跳び蹴り！！

中崎勝に１８８８のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

（以上、中崎勝の妄想タイムでした）

何コレデジャヴュ。

というか跳び蹴りで死ぬの？

何気にオオカミに攻撃されるよりダメージが大きいのだが……。

２を選んだ場合はどうだろうか……。

（中崎勝の妄想タイムの始まり始まり～♪）

中崎勝はドアを開いた！！

中崎勝はナチュラル土下座を繰り出した！！

しかし中崎まひるは見向きもしなかった！！

中崎勝はスライディング土下座を繰り出した！！

中崎まひるは怒りだした！！

中崎まひるのテンションが２００上がった！！

中崎まひるはスーパーハイテンションになった！！

中崎まひるの攻撃！！

１８８８０のダメージ！！

中崎勝は死んでしまった！！

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ

（以上、中崎勝の脳内妄想、もとい死亡妄想は終了いたしました）

何コレデジャヴュ・パート２。

んでやっぱりオオカミより攻撃力高いし…。

オオカミに襲われた時に死んだ方が楽に永眠出来たかな…。

と考えてる内に、

「……」

家から響いていた怒鳴り声が静まった。

これは正面突破の方が成功する確率が高いんじゃないだろうか？

これ以上立ち往生していても時間の無駄遣いだし。

と思い、意を決して玄関のドアを開いた。

するとそこには！！

「お帰りなさい」

エプロン姿のまひるが立っていた。

「おぉぅ…、ただいま」

突然の事で少し戸惑ってしまったが、殺される事は無いようだ。

「まひるにお風呂で限界まで煮られたいですか、まひるに料理されたいですか?それとも…、」

「ちょっと待ってまひる。今の選択肢だとお兄ちゃん死んじゃうしか無いと思うんだけど」

「だって息を止めることしか考えてませんから」

「怖えーよ!!……因みに聞いておくけど『それとも』の後は何て言おうとしたの？」

「まひるの隣で永遠に眠りますか？」

「聞くまでも無かったみたいだね……、で何故俺が殺される運命になってるわけ？」

「何故かと言いますと、まひるの大事な兄様が帰ってこない理由はまひるに何か至らぬ点があるという事なんじゃないかと思いまして、2日間寝る間も惜しんで熟考いたしましたが、皆目見当が付かず、それならばと思い、最終的に諸悪の根元である兄様をこの世から消せば一件落着なんじゃないかという答えに辿り着きまして」

「全然一件落着じゃないよ!!お兄ちゃん死んでるよ!!原点に返りすぎて犯罪に手を染めようとしてしまってる事に気付こうね!!」

「兄様を守るためならたとえ兄様であろうと邪魔はさせません」

「矛盾してるよね!!肝心なお兄ちゃんの人権その他諸々が守られ

てないよね!!」

「兄様は何もなさらなくても結構です、ただまひるに介錯されるのを待っていればいいのです」

「おーい、まひる?聞いてる?」

「兄様はどの方法で最後を迎えたいですか?首吊りですか?切腹ですか?飛び降りですか?自爆テロを起こしますか?いっそのこと青酸カリでも服用しますか?」

「死なないから!!それと別にまひるが悪いなんて事は何一つ無いから、安心して!!」

「兄様の事を考えると安楽死が一番良いかと思いますので、安楽死専用の薬を作ってきます」

あぁ…、全く話を聞いていない…。

こうなったら実力行使でもしない限りまず止まらない。

そう、俺の妹こと中崎まひるは世間一般で言う『ヤンデレ』という

ヤツなのだ。

いや、もしかしたらただ病んでいるだけなのかもしれない。

まひるは前述の通り、完璧超人なのだが、それのせいか頼られる事が多くなった。

まひるもその期待に全て応えようとした為、責任感が人より数十倍ほど強く育った。

それが強すぎたせいか、何か少しでも不具合が起こるとなんでも自分のせいだと思ってしまうらしい。

それで思い詰めた結果、曲解を出して失敗してしまう。

それがまひるの駄目な点なのだ。

こういう暴走をすると兄である俺が何とかしなくてはならない。

というか今回の場合は直接的な被害があるわけだが……。

その対処方法とは…

くすぐる事だ！！

「安楽死と言っても種類がありまふっ、ヒャヒャヒャヒャ！ハハハハハヒヒャヒャヒャヒャ！止めてくだ、ひゃい！！ヒャヒャヒャヒャ！！」

「ならまず冷静になるんだ！！」

たちまち形勢が逆転した。

元々はまひるを笑わしてやりたいと思ってやり始めた事だったのだが、思いのほかくすぐりに弱いらしく、暴走を止める時に使い始めたわけなんだが……

端から見ると変態だね。

「わっ、わかりまっ、したからっ、ヒャヒャヒャ！！止めてっ、くだっ、ヒャヒャヒャ！！い！！」

「やり方が分からなくなった時いち早くお兄ちゃんに相談すると誓えるか？」

「誓いまっ、フヒャヒャヒャヒャ！！」

「さっきはご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

まひるがひとまず落ち着いたらしい。

「まぁ、いつもの事だし良いよ」

いつもの事なのは駄目だと思うが。

まぁ、誤魔化す事も出来たわけだからいいか。

「それはそうと、昨日は一体どちらに？」

誤魔化せてなかった。

「いや、それはアレだよ、アノ…、いや、ソレがアレで」

「代名詞の使い方を1から勉強し直したらどうですか」

でも口が裂けても凛世と夜な夜な狩りをしていたなんて言えない！！

でも言わないと多分殺される！！

これなんて無理ゲー？

「もしおっしゃらないのなら…」

お？この展開は巷で噂のデジャヴュですかい？

『監視する』とか言い出して、実際にはお兄ちゃんの隣にいたいだけなんだろ？だろ？であれ！！（願望）

……うん、ないな。

「なら？」

とりあえず話を聞かないことには一向に事態は収拾しないから、必要最低限の文字数で尋ねてみる。

まひるの言うことは予想通り、予想（願望）とは全然違った。

「兄様を再教育します！！」

「いいよ」

「即答ですか！！」

いや、だって再教育って保健体育もあるんだろ？

んで、実技もしてくれるんだろ？だろ？であれ！！

「多分考えている事とは違うと思いますよ？」

「え？裸になってくれないの？」

「なりません！！一体どうしたらそんな結論に至るんですか！！」

さっきまで曲解を出してた人が言うセリフですかね。

「まぁいいです！で、再教育の方法とはですね……」

１０分後。

「え～～、なんでこんな事になってるんでしょうか、まひるさん」

「兄様がまひるに振り向いてくれないからなんですよ？」

ここで俺がどうなっているのかを説明しよう。

まひると抱き合った状態でロープに縛り付けられてる。

え？分かりづらい？

言うなれば、カップルが抱き合っているのをロープで外せなくしたような状態。

そういう、相手が妹でなければなんとも羨ましい状態になってるのだ。

「いや、いろいろ理解出来ないから」

「理解なんかしなくて良いんです、ただまひるの言っている通りにしていれば良いんです！！」

「じゃあ一応聞くけど…、これにはどういった意味が？」

「吊り橋効果ってありますよね？」

「ああ…、確か不安定な場所のドキドキを相手への恋心だと勘違いするってヤツ？」

「はい、それを実践しています」

はい？

……不安定というか動きづらいだけだと思うが。

「って事は妹に恋心を持てと？そう言いたいわけですね、まひるさん」

「はい！！最終的にはまひるしか見えないようになってもらいます！！」

「却下」

「即答ですか…、でもこの状態を続けていけば必ず！兄様はまひるに振り向いてくれる事でしょう！！」

「……無駄だと思うけどね、気の済むまでやってみたら？」

「はい！！」

とまあ、こういう訳で。

俺は家にいる間、風呂（流石に拒否した）以外は妹と抱き合ったまま生活するようになったのだった……。

5．竜狼相搏つ！？

次第に暗くなってきた頃…

俺は唯一自由が認められた風呂場にいる。

一通り体を洗って熱々の湯船につかり、これまでの3日間で起きた出来事を整理してみた。

まず建立記念日と知らずに学校に行ったらオオカミに襲われた。

これがすべての元凶だったんだよな…。

んで凛世に会って狩りに連れて行かれた。

熊を狩るとかどこのハンターなんだよ凛世は。

次に晴美に殴られた。

あれで死ななかったのは奇跡と言っても良い。

それから天井に吊り上げられて……

なんでだろ、この3日間自分の人権が一切守られていないような気が……。

まあそれから凛世ともう一度会って、勉強会をする事になって、俺の家に……。

って、

「忘れてたぁあああああああ！！」

（バンッ）

「どうかしましたかぁ兄様！！」

「何でもないから風呂場に入ってくるなぁあああああああ！！」

「まひるはいつでも準備万端ですよ？」

「訳分からない事言ってないで早く出て行けぇえええええええええええ！！」

「すみません冗談です！！ただ一刻を争う事態がありまして……」

「おぉ…、何だ？ツマラナい事だったら兄妹の縁を切るぞ」

「それだけは勘弁下さい！！……もし縁を切られるような事などあれば、まひるも兄様の首を切らざるを得ません」

「怖いよ！！」

「大丈夫です、まひるもその後お供いたしますから」

「どこが大丈夫なんだ！！さっきのは冗談だから止めてくれ」

「本当にですか？」

子リスのように縮こまり、か細い声で再確認するまひる。

「あぁ、冗談だよ。だから話してごらん」

抱き締めたい感情を抑えられなくなるから。

「それがですね…、オオカミが家の周りを囲んでいるみたいなんですよ」

何ですと!?

凛世の奴、一家総出で来やがった!!

「あぁ……、ちょっと待っててね、服着るから」

「分かりました、お手伝いさせてもらいます」

「いやいやいや!!大丈夫だから、外で待ってて!!」

もう既に危ない状況なのに、それ以上されたら理性とか何やらがぶっ飛びそうだし!!

「そうですか……、まひるは兄様の召使いすらさせてもらえないのですね。という事はまひるは奴隷、または人間ではない、つまり生

きている価値は無いのですね」

「いや、そんな事言ってないって」

「かくなる上は身投げも辞しません、今まで本当にありっヒャッヒャヒャヒャヒャヒャ！！」

全力でくすぐり倒した。

やはりこれからは早めに策を打つべきだな。

「……部屋で待っててくれるね？」

「ハヒャヒャヒャヒャ！！ヒャッヒャッ、ヒャい！！分かりヒャヒャ！！止めっ、ヒャヒャヒャヒャ！！」

結果、兄の圧勝。

という事で、まひるはそのまま部屋に戻り、俺はというとさっきまで着ていた私服を洗濯機から出してもう一度身に着け、玄関へと走った。

だが、手遅れであった。

何故なら……

（バコーーーン！！！！）

扉が吹っ飛ばされたからね。

「……只今参上」

「せめてもうちょっと違う入り方をして欲しかったな…」

あぁ…、ドアってどう修理するんだろ。

「……鍵が掛かっていた」

「だったらインターフォンを押すなりしてよ」

「……？」

「え？もしかしてインターフォンを知らないの？」

「……（コクン）」

ドコゾの原始人！？

まぁ、野生生活してたんだから知らなくても無理はないか。

「よし凛世、一旦外に出よう」

文明の利器とやらを教えてやらんとな。

「これがインターフォンだ、ココを押してみて」

「……ココ？」

細く、しなやかな指でインターフォンのボタンを押す。

すると、

（ピンポ～～～ン）

と、馴染みの音が家の中にこだまする。

「……！！！！」

（ピンポ～～ピンポ～～ピンピンピンポ～～～ン）

凛世はかなり驚いたらしく、ボタンを連打しては、目を皿のようにしていた。

こういう光景を見ると、子供に教えてるみたいで何だか和むな。

と思ったのもつかの間。

「インターフォン鳴ってますよ兄様」

まひるが出てきてしまった。

「ガルルルルウゥゥ」

即座に臨戦態勢に入る凛世。

「何ですか、兄様に危害を加えるのなら容赦しませんよ！！」

こちらも構えるまひる。

「待て待て待て待て！！」

「ガルルルルウゥゥ」

「……行きます！！」

両者が間合いを詰めにかかった。

あぁ、もう……無理だ。

さあ皆さんもご一緒に。

「メディーク！！」

（死亡フラグ　６＋１＝７）

あの後、まひるに実力行使もといコチョコチョを繰り出して一旦コトは収まったのだが……。

「兄様、これはどういう事か説明して下さい」

「……どういう事？」

誤魔化せなかったみたいです。

「あぁ……、えぇ……、実はカクカクシカジカなんだよ」

「分かりました、この変態犬耳女がストーカーなのですね」

「……オオカミ耳」

「いや多分違うし、凛世もツッコミどころがおかしいよ」

「じゃあ言葉を濁さずにちゃんと言って下さい！！」

「でもなぁ…、凛世、言ってもいいか？」

「……生徒？」

まひるを指差す凛世。

「ん？まひるの事か？まだ中学3年生だから生徒じゃないよ」

「……ならいい」

お許しも出たところで。

「実はな……」

「なるほど、つまり2人の仲を例えるとしたら『狩り友』という事ですね」

「あぁ」

「つまり恋愛感情はないと、そういう訳ですね」

「あぁ」

「……勝は群れの仲間」

「ちょっと凛世、ややこしくなるから喋らないで」

「むむ、群れって家族って事ですか！？」

ああ…聞こえてたよ。

「……だから一族で挨拶を」

「ガルルルルウゥゥ」

「待て待て、なんでこういう事になったんだ？凛世」

「……縄張りに入る事の許可を得たから」

あぁ…、なるほどね…。

「人間界では家に呼ぶ事は友達の証であって家族の証では無いんだよ」

「……！！」

初耳だ！！という風に愕然とする凛世。

「という事だから大丈夫だよ」

「そうみたいですね、なら私は部屋に戻ります。ドア直しておいて下さいね」

「あぁ、分かったよ」

まひるが部屋に引っ込んで、2人＋オオカミ沢山になった時、

「……勝」

「おぅ、なんだ？」

「……諦めないから」

「？？？」

そう言うと、踵を返してオオカミと一緒に走り去っていった。

「おーい！！勉強するんじゃなかったのかぁ！！」

と言っても帰って来ることは無く。

今日は事なきを得たのだった。

6．平和な日曜日、とは行かない。

一連のゴタゴタの後、俺は久しぶりに寝床に着いた。

着いたのだが……

「なあまひる、この体勢どうにか出来ないのか？」

「絶対出来ません」

そう、俺はまひると抱き合った状態で縛られているのだ。

理由は言うまでもないが、まひるとそういう契約を結んでしまったからである。

「せめてさ、縄をほどくとかさせてくれると有り難いんだけど」

「いけません、寝ている間に寝返りをうつといろいろ面倒ですから」

「でもほどかないとお兄ちゃん寝れないんだよ」

ただでさえいろんな所に当たる状態のに、パジャマになってよりリアルに感じれるようになってしまっているのだ。

妹と言えど、やはり意識してしまう。

「寝れないのなら寝れるまで頑張って下さい」

「この状態に慣れるまでに過労で死んでしまいそうだよ」

「なら文字通り死ぬ気で眠りについて下さい、そしてこの状態が当たり前のように感じるようになって、あわよくばまひるを襲ってあんなコトやこんなコトを……」

「ヤバい、そんな陰謀が潜んでるなんて考えもしなかった」

「そうでしょう、名付けて『既成事実作っちゃおう作戦』です」

「でもそれ本人に言ったら意味ないよね」

「あ…、でも欲望を抑えられないまで誘惑するので大丈夫です」

「その言葉は出来ればお兄ちゃん以外に使ってほしいな」

近親相姦なんて神話の世界だけにして欲しいぜ。

「とりあえず、この体勢を変えることはありませんから」

「さいですか」

「あ、もし抑えきれなくなった場合はロープをほどいても良いですよ」

「そんな事絶対起きないから！！」

という事で前述の通り、抱き合いながら寝る事になったのだが……。

ああ！！

髪の毛からシャンプーのイイ香りが！！

柔らかく小ぶりな胸が！！

これまたしっかりしつつそれでいて弾力のある太ももが！！

という風に案の定誘惑されまくって一睡も出来なかった。

いつの間にか外は明るくなっていた。

寝るはずだったのにただただ疲れただけだった。

しかも縛られていたせいでむやみに動く事も出来ず、筋肉痛になってしまった。

まひるはというと、

熟睡していた。

しかも心なしか肌がいつもよりツルツルしている気がする。

何故なのかは怖くて聞けないが。

妹の寝顔を見るのももう限界だし、そろそろ起こすか。

「とりあえず起きようか、まひる」

全く反応を示さないまひる。

「おい、まひる起きろ」

やっぱり全く反応を示さないまひる。

「起きないとイタズラしちゃうぞ」

「イタズラだったら存分にやっちゃって下さい」

「起きてるね」

「起きてません」

「寝ている人間は喋らないはずだよ」

「これは寝言です」

「寝言だったら返事は出来ないはずだよ」

「じゃあ一種の催眠にかかってるんです。返事に全て答えてしまうという」

「なら着替えるから一旦ロープをほどこうか」

「このまま着替えてもいいですよ？」

「まひるは良くてもお兄ちゃんはダメなんだよ！！さぁ、ほどこうか」

「無理です」

「何でだよ」

「だって……、ほどけないように細工をしましたから」

へ？

「ちょっと待って、どういうこと？」

「ちょっとやそっとじゃ結び目がほどけないようにと少々複雑にロープを縛らせてもらいました」

「ちょっと！！どうすんの！！」

「まひるはこのままでいてもいいんですよ？」

「ダメだから、社会的に死ぬから。というか完璧起きてるよね」

「あ、はい、起きてます」

「ならとりあえずハサミを取りにいこうか」

ほどけないなら切る他ないだろう。

「でもハサミって家にありましたっけ」

「俺は学校に荷物全般置いてきてるから」

「まひるもです」

なんだかんだ言って似た者兄妹だった。

「あぁ…、どうしよう」

「プラスチックのハサミならあるんですけどね…」

「他に刃物っていうと包丁ぐらいか」

「怖いから嫌ですよ！！」

「分かってるよ、じゃあ……買いに行くしかないだろうな」

「でもどうやって買いに行きます？流石にこの姿で街を歩きたくはないです」

「まあ誰だってそうだろうな」

「せめて着替えてからですよね！」

「ちょっと感性がズレてるようだけどね」

あの後いろいろ協議した結果、近くのコンビニに買いに行くことになった。

そして行く方法なのだが……

「まひるは前も後ろも見えないので合図宜しくお願いしますね」

「あぁ、分かってるよ」

一回り大きな服を羽織り、まひるを覆い隠すようにしたのだ。

そうすれば、やや不自然ではあるが、まひるが抱きついている状態である事はまずバレる事はない。

が。

「ねぇー、あの人どうなってるの」

「こらっ！指差さないの」

視線が痛い、痛すぎる。

早く移動しようにも、

「……漏れるのでゆっくり動いて下さい」

まさかの尿意ときた。

これはもうどうしようもない。

つまりだ。

拘束が解けないとトイレに行かせる事が出来ずにまひるがお漏らしをしてしまう。

だけども急げば急ぐほどお漏らしする確率が上がる。

あぁ！なんだこのジレンマ！！

あぁ！もうこうなったら心の中でだけでもあの言葉を叫ぶしか無かろうて！！

行くぞ！！

1、2、3。

メディーク！！

（死亡フラグ　7＋1＝8）

（ジャーーーーァ）

「あぁ…何だか、いろんなモノが一緒に出たような気がします……」

「俺も気力体力ともにマイナスゲージに振り切ったよ……」

（死亡フラグ　８－１＝７）

本当にギリギリだった。

家から５００メートル先にあるコンビニまで２０分。

コンビニに入ってからハサミを買うまで５分。

トイレを借りてロープを断ち切るまで５分。

計３０分もの時間を費やして、遂にロープの呪縛から解き放たれたのだった。

「これからはこうならないようにしてね」

「はい、もうハサミを買いましたので寝る時には寝床に置いておけば万事オーケーです」

「そっちに行っちゃた！？」

ロープで縛るのを止めようという思考は無いのね。

「ロープで拘束しない限り安心出来ませんから」

「まあ良いんだけどね、お兄ちゃんも承諾しちゃったから」

そしてこれから先もまひるに恋心を抱く可能性など皆無だから。

とまあこんな具合に、人生の山場というにはちょっとちっぽけでしょぼいハプニングを乗り越えたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7479x/

死亡フラグの回避方法を教えてくれ

2011年11月26日00時56分発行